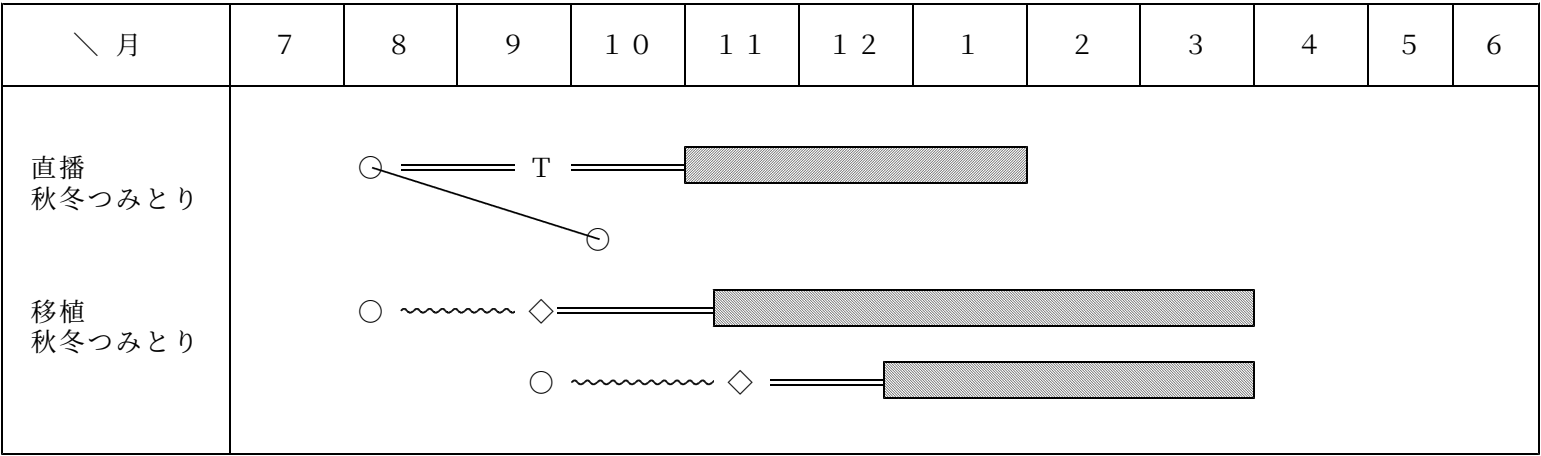


しゅんぎく



(凡例) ○：は播 ～～：育苗 T：間引き ◇：定植 ==：本ば管理 ■：収穫

1. 品種例 きわめ中葉春菊(株張り中葉種)
2. 目標収量 6,000 kg／1,000㎡（つみ取り3回として）
3. 栽培のポイント
- ☆適応薬剤が少ないため、耕種的防除による病害回避や害虫侵入防止に努める。
- ☆直播栽培だけでは収量が落ちるので、早めに切り上げ、移植栽培との体系化を図る。

4. 技術内容

(1) 種子の準備

- ① 自家採種では、未熟粒が多く混入するので、風選などにより選別を行う。また、炭そ病軽減と休眠が終わっている点から古種子（3年程度）を用いる。
- ② 種子量は苗床 100㎡あたり 500ミリリットル を目安とする。
- ③ 炭そ病予防のため、1昼夜水浸、水切り後に種子重量の 0.5%のベノミル・チウラム水和剤を種子粉衣する。

(2) 直播栽培

10月出荷は直播栽培を行う。ただし、高温期の栽培では心枯れ症状が発生しやすいことに留意する。。

本ばの準備等は後述の移植栽培に準じて行い、条間12～15㎝ですじ播きする。間引き作業が必要であるので、一回の播種面積は 300㎡までとし、5日程度の間隔で順次播種する。

播種量は 1.5リットル ／1,000㎡

(3) 移植栽培

直播き栽培だけでは、後期の品質と収量が安定しないので、長期にわたって一定水準の品質と収量を確保するために、移植栽培を組み合わせる。

苗は早播き直播栽培の間引き株を利用してもよい。

① 育苗床準備

(7)排水良好地を選び、本ば1,000㎡当たり250㎡を目安とし、畝幅100～120㎝、高さ10㎝程度にする。

(4)育苗床施肥

1㎡当たり細粒 8 6 8 を 0.1 kg、苦土石灰 0.12kgを全面施用し、深耕する。

② 播種

適期は9月中～下旬である。条間10㎝で、播種機ですじ播きする。

播種面積は、定植が一人 100㎡／日が限度であるので3回に分ける。

③ は種後の管理

(7)間引き1回目は、本葉2葉までに密生部を間引く。

2回目は、本葉4枚頃、株間5㎝間隔にする。

(4)排水を良好にし、軟弱徒長させない。

(ウ)定植適期の目安は育苗期間30～40日で本葉6枚である。

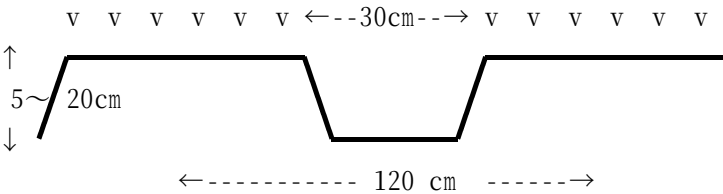
(4) 本ぼ準備

① 施肥例 (kg／1,000m²)

肥料名	成 分	基 肥	追肥 1	追肥 2
熟成堆肥		3,000		
苦土消石灰		120		
野菜有機S2等	8 - 7 - 8	200		
野菜有肥S4等	14- 3 -10		30	30

② 畝立て、栽植密度

畝立て後、グリーンマルチを掛ける。
条間、株間とも各15cm (33,000株／1,000m²) とする。
畝の高さはほ場の乾湿を考慮する。



(5) 定植

本葉 6 枚時(遅くても 7 枚)に、良苗を 1 本植えする。
移植後は灌水を十分行う。

(6) 灌水

マルチ下に予め灌水チューブを配置し、畝の表面が白く乾いたら,晴天日の午前中に行う。

(7) 追肥

1、2 回目つみ取り終了時に施肥例を目安に施用する。
灌水チューブを使って液肥を施用してもよい。

(8) 病虫害防除

登録薬剤が少ないことから、耕種的防除を励行する。

マメハモグリバエ対策

生存期間は21日程度であるため、栽培前に施設サイドを目合い 1 mm 以下の防虫資材で被覆してから耕起し、表面に残渣、雑草等が一切出ないようにし、3 週間以上経過させる。

なお、サイド被覆は10月末まで行い、作業者の出入り以外は引き戸を開けないなど、厳密な管理で虫の侵入を防ぐ。

(9) 生理障害（心枯れ症状）

生長点付近の展開前の葉が褐変する症状。高温期のは種を避ければ、症状は軽減される。

(10) 収穫

① 収穫作業

定植後約 1 ヶ月で主枝が収穫できる大きさとなる。
主枝は 3 ～ 5 葉を残して摘芯収穫し、以後側枝(1 次分枝、2 次分枝)を伸ばし、約20cmの長さでつみ取り収穫を 3 回程度繰り返す。
つみ取り収穫したものは傷んだ葉、枯れ葉を取った後、長さを揃えて平束の形で袋詰めする。

② 袋詰め下敷きの利用

袋詰め作業においては、収穫物をスムーズに袋に入れることがむずかしい。そこで、滑りやすい厚手の材（使用済肥料袋等）を適当な大きさに切る。これで平束を包み袋入れを行うと、収穫物が袋に滑り込みやすくなり、作業効率があがる。

(山田 浩)